

中高年期における「人生を書く」ことの意味

——生涯学習への意欲の形成——

生涯教育計画コース 中 川 恵 里 子

The Meaning of Writing about One's Life in Middle-old Age :

Forming Motivation for Life-long Learning

Eriko NAKAGAWA

In Japan, since the movement of Seikatsukiroku in 1950's, the meaning of writing of common people about their lives has been argued from not only learning, but historical or cultural point of view. The core members of the movement were young adults. Nowadays, middle-old aged persons often do that for the purpose of finding their lives worth living. This paper, by presentating a lot of writings of middle-olds and analyzing them, discusses the reason why they dare to write about their lives today. Based on that thinking, we try to elucidate the relationships between the writings and mans mental developement in life stage. So we find writings joining them to society and to their life history. And it cultivates communications inside themselves, so that develops not only the recognition or creativity but emotional advancement. More significantly, the cultivated communications inside themselves make a demand for re-understanding the meanings of their lives. That causes the motivation for life-long learning.

目 次

はじめに

I. 大人が書くことは何を意味してきたか

A. 文化運動としての歴史とその議論

B. 趣味や生き甲斐としての自分史

II. 分析の目標と方法

III. なぜ人生を書くのか

A. 自己の人生の受容

B. 存在意義の確信と生きる意欲の形成

C. 人生という物語の構成と生き方の模索

D. 自分との対話の創造—Convoyとして

IV. 生涯学習への意欲の形成

A. 人生の意味のわかり直しへの志向

B. 「書かれる人生」と「生きる人生」

おわりに

はじめに

「自分探し」や「自己実現」、もしくは「いきがい」

などの言葉をよくみかける。これらはおもに、大人の「心」の問題をいう時に使われるようであるが、「生きがい」はおもに高齢者について、「自己実現」はどちらかというと中年期の成人によく使われるのに対して、「自分探し」はより若い人々の問題として語られることが多い。しかし、このような言葉の違いはあれ、人が自分自身の「生き方」や「生きる意味」を生涯を通じて摸索し続ける存在であり、とりわけ、現代社会においてはこれらが見いだしにくいからこそ、よけいに問題にされ、論議されるともいえよう。

生涯学習の、特に大人が学習しようとするときの主要な動機には、職業能力や技能を高め、社会に適応していくという側面もある一方で、「自分探し」や「自己実現」、「生き甲斐」などの言葉で表わされるような、生きる意味を追求し、新たな生き方を創っていくという姿勢も、とりわけ中高年の学習動機を形成する主要な要因といえる。例えば、歴史を学習することによって、自分自身の生きてきた時代の意味を知り、それに照らして自分自身の人生をより大きな枠の中で理解し直し、受け入れ、そこから、新たな生き方を創出していくというような経験

は、この論文で扱う中高年の手記のなかにもたびたび表現されている。近年、中高年の間で自分史などの自己表現活動が盛んであるのも、このような「生き方」を模索する現代中高年の心の在り方を示唆するものだと考えられる。そこでここでは、このような「大人が生き方を書く」ということに注目し、中高年の書いた手記を実際に分析しながら、「書くこと」が現代に生きる中高年にとってどのような意味を持ちうるのか、また、それが生涯学習とどのように関わるのかについて考えてみたい。そこから、人生のクリエイターとしての中高年期の可能性と学びについて探っていく。

I. 大人が書くことは何を意味してきたか

A. 文化運動としての歴史とその議論

1. 生活記録運動と若者のアイデンティティ形成

大人が書くことの意味は、1950年代の生活記録運動以降、我国においては、その学習的意義のみならず、文化や社会や歴史という視点からも多くの論者たちによって多面的に論じられてきた。いずれにせよ、大人の場合、子供の学習と異なり、書くことが自発的に行なわれるわけであるから、これまでの歴史を振り返ったとき、多少なりとも文化運動的な要素をもった活動として理解されるべきことがわかる。

例えば1950年代には、農村青年や紡績工場の女工さんといった勤労青年や主婦達の間で共同学習が盛んであったが、その共同学習のひとつの方法として、互いの生活を話し合い、書きあうという生活記録が各地で盛んになり、文化運動として展開していった。¹⁾ この生活記録運動そのものは60年代をまたずに衰退していくが、その意味は、当時実践に直接関わった鶴見和子²⁾や大田堯³⁾らだけでなく、その後も繰り返し再考されてきている。当時の運動の主体は勤労青年という若者達であり、民主化の掛け声とは裏腹な封建性の強く残る社会において、口では喋ることのできない事を書きあうことによって、自分の悩みが自分だけの問題ではないことを確認しあい、社会化していく中で、個人の生活実感の吐露に留まらず、それを媒介にしながら、社会的立場や役割を認識していったのである。⁴⁾ しかし、実際には、このような理念もさることながら、自己を表現することによる精神的開放感や仲間づくりといった、情緒的な効果も無視できなかったと考えられる。⁵⁾ ここで培われた精神的な基盤をもとに、若者たちは1950年代という戦後の社会的変動期を仲間と共に乗り越えていったといえよう。生活記録や共同学習は、彼らにとって、自分たちの共通の問題を認識す

ることによって社会の問題性を知り、そこから自らの役割を見出していくという、アイデンティティ形成の道を開く方法であっただけでなく、社会の変動に立ち向かい、新たな社会を創っていこうとするエネルギーの供給源でもあった。

2. 自分史運動と中高年

1960年代に入ると「万人の文章・万人の本」をめざして、誰もが気軽に書くことを勧める「ふだん記」の会が、八王子の橋本義夫(当時56歳)の提唱で始まり、多くの中高年の心をとらえつつ、70年代にかけて東京近郊でひろがっていく。この運動は公民館などの社会教育の場にも影響をあたえ、自分史講座などが学習内容として生まれるに至る。⁶⁾

また、民衆史研究の立場から「自分史」に注目するようになっていた色川大吉が、庶民が書くことの価値を見出し、自分史を書くことを提唱したのも70年代半ばのことである。色川は日本人の思想における主体性の道を探っていたが、その方法を完成された思想にではなく、「現実活動している人間たちの……混沌と生き、思考していることがら」に求め、⁷⁾ そして、「独白や口承を文字化することによって、人は自分を相対化し、自分以外の人生を生きる価値や世界を発見し、人たることの深遠な意味に到達する。同時にそれは、自分の経験を理論化し、精神的な共有財産に変えさせる」と自分史を意味づけた。⁸⁾ 色川のこの解釈は多くの中高年(特に戦争を体験した世代)の賛同を得、70年代以降、自分史愛好者を増やすきっかけとなる。このように、歴史的な視点から自分史が意味づけられることによって、「人生を書く」という私的な行為に、社会的・歴史的な価値が付与された。そして、このことは、自分史を書こうとする人々を多に勇気づけたのである。

B. 趣味や生きがいとしての自分史

文化運動ともよべるべきこのような自分史への志向は、80年代以降も引き続き、現在に至っている。しかし、グループによる文集づくりという自分史運動の初期の形態は、現在でもなお多くの人々に親しまれている一方で、商業的な企画を利用して自費出版するなどの個人的な活動も一般的になりつつある。また、自分史講座や学級などの名目で、学習機関における主要な学習内容・学習方法の一つとして、もしくは、自治体や企業の文化・福祉事業として定着するなど、その活動形態も非常に多様化してきている。したがって、現在では、運動という意味あいも薄れ、趣味や生き甲斐として中高年の生活の中に定着してきつつあるという見方もできよう。

II. 分析の目標と方法

この論文では、現在の中高年の日常的な活動として、生き方を書くことがどのような意味をもちうるのかを、中高年の意識に依拠し、発達や学習という立場からみていきたい。1950年代に、勤労青年たちを書くことに向かわせた生活記録運動や、70年代の自分史運動と、現在はどうのような点が継続し、どのような点がかわってきているのだろうか。このような視点から、調査対象としては、グループを作り表現活動を続けている人々よりも、活動母体をもたない「個人」に注目したいという点と、近年、多くの参加者をあつめ、中高年に在宅しながらの書く楽しさを提供しているだけでなく、その生き方や主張を社会にアピールしていく媒介的役目を果たしているといえる自治体や企業による福祉・文化事業に注目してみたいという二点から、それらの企画への投稿手記を分析しようと試みた。

分析に用いた手記は、1993年に読売新聞社が55歳以上の中高年を対象に実施した作文コンテスト「盛年の主張」への応募作品（総投稿数1477）である。かなりまとまった数があるものの、作文という性質がら、資料を数量的に分析してもあまり意味がない。むしろ、ここでは数量化できない内容を読み取っていくべきではないかと判断した。このような理由から、全体をよく目を通した上で数点を選んだ。選んだ基準は、内容が理解しやすく、特徴的な要素をもつことであるが、いろいろな選択がありうるのだと思う。なお、手記全体を掲載するのは限界があるので、省略した部分も多いが、その際には作者の主張ができるだけ損なわれないように試みた。原文は400字詰め原稿用紙にして5～10枚位であった。読売新聞社は寄せられた手記の中から50点を選び、「盛年の主張」という題名で、1993年にごま書房から本を出版している。筆者はそれによってこの企画を知り、新聞社の厚意のもとに、1994年7～8月の間、読売新聞本社にて全応募作品を閲覧し、実名をださないという約束でその中から数点を分析のために使わせていただいた。なお分析に用いた手記は出版された50点以外のものである。

応募手記を男女別、年齢別に数量的に分析した結果、その応募数は、50代から60代前半では、男女差が認められないばかりか、中年女性の作品のほうに質的に面白いものが多いのに対して、いわゆる高齢者と呼ばれる65歳以上になると、男性はかなりの高齢になっても応募が多く、書くことへの熱心さが伺われるのに対して、女性は極端に少なくなる。その少ない応募女性の大半は元教

員⁹⁾というデータから考えて、現在高齢期にある女性たちは、このような場で書くということに抵抗があるのではないかという文化的な問題と、取り立ててこのような機会を利用しなくても自己表現の場を他にもっている、裏返せば、中高年男性は、他に自己表現の場がないのではないかという社会的な問題性も浮かび上がってくる。取り敢えず、この問題は、ここではいったん保留したい。

55歳～90代までの手記を読んだ結果、中年期と高齢期とを分けて考えることはあまり意味をもたないことがわかる。その理由として、高齢期は高齢期として生まれてくるわけではなく、老いを迎える前にどのように生き方を定めていったかという中年期、特に、中年後期の生き方からの継続的な要素が大きく影響しているらしいこと、裏返せば、50代から60代始めという中年後期にしても、高齢期を迎えて初めて、その位置づけがわかってくるという関係性がひとつ、もう一つは、身体的にも、社会的にも、個人差が拡大しつつある状況の中で、年齢をもって分類することの意味も曖昧になってきているのではないかということが手記の内容からも推察される。したがってここでは、人生後半期という一括した捉え方で、中高年の手記を分析していく。

III. なぜ人生を書くのか

A. 自己の人生の受容

人はなぜ、自分の人生や生き方をあえて語ろうとするのであろうか。おそらく、まず第一は、自分の人生を自分自身で納得し、受け入れていくためであると考えられる。¹⁰⁾このような心情は、55～60代はじめの中年後期の女性の手記によく表現されている。

手記1) 56歳の茅ヶ崎市の女性、夫と離婚、現在ウェイトレス

二人の子供が小さかったころ、家事育児に時間をとられて、どんなにか、自分の時間をほしかったことだろう。今、仕事からかえると、自由時間に満ちている。疲れていると自分に言い分けをしながら、横になって好きな本を読む。でも最大の楽しみを満喫しながら、怠惰な生活をしている罪悪感がいつも心の片隅にある。若いころ求めた、自分の時間は、今のものと違う。あの頃は、得られないものを求め、得られた今は、形にならないものに不安を感じている。……
・生涯現役という名のもとに、有名人の例がよく揚げられている。老いてなお、仕事に精を出し、信念を通す。誰もがそうしたい。しかしそれは、さまざまな条件にめぐまれた人だけができることであって、私たち一般人は、自分の立場を理解して、努力しながら、何かに役だっているという意識をもって毎日を過ごすだけのささやかな願いでさえも時としては難しい。後戻りはできないにしても、60歳はまだ若い。せめて、年金を貰えるようになったら、好きなことをしたい。ものを書きたい希望もずっともっていた。でも、実際には、あまり書いたことはない。そうだ、ワープロを練習しよう。本の朗読もしたい。そうしたら、人の役にも少しはたつてあろう。……

ろ考えると、私の夢はひろがっていく。あるがままの自分を見つめつつ、はつらつと生きていくことができたときから、自分だけの人生がはじまるのだと期待している。

手記2) 60歳の熊谷市の元教員、独身、実母の介護中

現職中癌に侵され闘病生活を送ったものの、復職できて、教師の職を十分堪能しました。今はその職もさり、老母の介護をしています。時間的な余裕ができ、過去の自分を振り返ったとき、やはり私は教育人間でした。すべてを教育にささげ、その中に生き甲斐を見出していたのです。ですから豊かな趣味もありません。こんな状態で定年をまたずに心の準備もないまま、母の病気のために退職せざるをえませんでした。……退職した次の日から生活設計にとりかかりました。生き甲斐づくりとは、私にとっては、全力投球で生きてきた生活の足あとを見直すことによって、泉のように湧いてくるものだと思います。……私にとって、私自信の老後に備えることも生き甲斐のひとつです。……教員を長くしていたこともあって、子供たちが、日曜日にきて勉強をしていくようになりました。一回教えてやると、また、やってきます。一見塾のようにもみえますが、私にとっては子供の成長が楽しみです。こうなると子供の力にあわせた問題づくりにも意欲をもやさなくてはなりません。……癌に侵されてホスピスという言葉をしりました。しかし、内容を深く知る機会がなかなかありませんでした。暗中模索しているうちに、それでもさまざまな情報を得ることができるようになりました。死の教育についても興味はひかれます。在宅の学習には限度がありますが、いま、ひとつひとつの情報に胸を躍らせています。私は、自分の終焉のために何をしておかなければならないのか、今の私なりに考えをまとめようと着手したところです。私の生き甲斐は一点に集中することなく広がっていきますが、これから先の我が人生を見据えていくことにより、絞られてくるでしょう。

手記3) 61歳の桑名市の主婦、義母の介護中 ～今が一番いいときだと信じて～

夫の急死を引き金に姑が倒れるというダブルパンチに見舞われたのが10年前だった。しかし、マイナス条件をかぞえず、苦しみや困難を最良の友として少しでも楽しい介護生活をと、ころがけている。……ともすれば、見失いがちな姑と私の優しい時間のために、楽しい時間割りを創って、休憩時間に深呼吸。吸収した新しい酸素を姑に還元している。私は、中国人の文通している友人が数人いて、中国に留学するのが夢なのです。「介護の幸せがわかる人なら、障害学習の長距離ランナーとして完走できる」というのは看護婦の友人の励ましの言葉である。……若いころは、些細なことで、ストレートに傷ついた思いも、長年の経験が弾力のある思考の壁となって憎しみさえも愛に昇華できる今が一番いいときと信じて……

このように、一般的な基準から言うと、むしろ恵まれていないといえる状況の中で、この女性たちは、生き方を語ることによって、自分に与えられた人生を受け入れるだけでなく、もっと積極的に、喜びに転換していかうとしている。最後の61歳の主婦の言葉にあるように、苦しみや困難に耐えるのではなく、それをも「最良の友として」受け入れ楽しむ、そんな人生の物語を自分自身に語ることによって、「今が一番良い時だと信じて」現実を生きるのである。幸せ作りとは、人生の意味をいかに創っていくかによって可能となるといえるようだが、それが自分の問題として自覚し、語れるようになるのは、やはり「長年の経験が弾力のある思考の壁となる」人生後半期に入った者の大人の姿勢といえないだろうか。

しかしながら、一見、社会的には孤立しているように見える彼女たちも、単に自分ひとりで模索することによって生き方を見出していけるとは考えていない。手記1の女性は人の役に立つことをしたいと言い、手記2では、子供の勉強や在宅学習に夢を見出している。手記3では、姑の介護をしつつも、中国語を習い、留学の夢を語っている。このように、空間的・社会的には限定された環境においても、自己を閉ざしてしまわず、というよりむしろ、そんな立場におかれているからこそ、意識的に社会に対して目を開き、新しいものを吸収することに敏感になる。書くことは、ここでは、社会への意識を刺激し、育んでいく触媒の役目もしているといえよう。

とはいえ、鶴見和子がかつて生活記録の理論化を試みた時、堂々巡りで出口のみつからない(初期の)文体を、「独言」や「私小説的」文体と呼んで、単に自分を慰めるだけで泡のように消えていく言葉だとし、社会的ひろがりを持つ対話としての文体から区別したように¹¹⁾、書くことによって自己に埋没し、自家中毒に陥るような場合も確かに存在する。しかし、本論の調査で扱った手記は、投稿という形式のせい、その多くは社会に向かって語るといふ意識に支えられたものであり、積極的な社会意識を読み取ることができる。

手記4) 58歳の東京都の元会社員・現在、異業種交流会の代表幹事

50歳の時、運命的な人生の転換期に遭遇した。離婚による家庭の崩壊である。倒産の危機にあった会社に出向し、再建に成功して本社への帰任が決まったとき、離婚を告げられた。やり場のない怒りと無常観に襲われた。そんなとき、「野たれ死にこそ男の生き方」という言葉にであった。苦渋の中ですべてを捨て、すべてを諦めて最後にたどりついた心境が、「一日一日を大切に生きる」という、極単純なことであった。人は、生きるためには自分の存在意義がほしいものである。自分が必要とされていることで生きる価値を見出すのである。そして、生きるためには楽しくなければならぬのである。萎えた私の心を励ましてくれたのは、「首は縦に振るためである。人生をもう一度、積極的に生きてみないか。」と諭されたのである。……人生を楽しくというのは易いが、会社人間で無器用な私にはどうすればいいのか分からなかった。しかし、どん底から這い上がるためには、自分自身が変わらなければならないこと、首を縦に振り続け、何事にも挑戦していけば人生が変わるとおぼろげに感じた。人生の再出発は仲間づくりから始めた。そして多くのグループ活動と関わっていった。趣味を広げ、再婚もした。首を縦に振るたびに仕事が増え、次々に遊びの肩書が増えていった。……「野垂れ死に」とは、ひとりぼっちの極限ををいい、その極限を知った人こそ、人の痛みを知り人に優しくなれるのではないだろうか。会社を退職すれば、必然的に生活は大きく変わる中で、自分が変わらなければ、相手にされない事態がやってくる。自分を変えるためには、首を縦に振り続け、積極的に働かざるをえない状況を自ら作っていくことだ。働くことで自分を確実に変革できる。第二の人生は、自分で自分を創っていく時期であるのだ。

この節では、書くことは自分の人生を納得し、受容し

ていくことだとのべたが、そこにとどまるものではなく、同時に自己を社会に向かって開くことにも通じることもわかった。次節では、そのような、社会との関係についてより詳しくみていきたい。

B. 存在意義の確信と生きる意欲の形成

手記4の男性が、「生きるためには自分の存在意義が必要だ」と主張しているが、生き方を書くことのもう一つの大きな動機は、自分で自分の人生を納得するだけでなく、人からも認められ、批准してもらうことにある。そうすることによって、人は現在の自分の存在意義を確信し、生を高揚させ、生きる実感を味わうのである。そして、そこから生きる意欲を新たにしていく。私の生き方を人に聞いてもらいたい、自分の理解者が欲しいという気持ちは、基本的には老若問わず共通の欲求といえようが、とりわけ、大方の人生をやり終えたと感じている年代の者にとって、生き方を世に問い、批准してもらうことは非常に重大なことである。加えて、現代の中高年は、その体験してきた歴史を振り返ると、敗戦による価値意識の転換からはじまり、最近では、ハイテク化による早期退職やリストラの対象となるなど、目まぐるしく変わる世の中の構造や価値意識の変化に、一番翻弄されてきた世代の人々である。それだけに、生き方への確信や自信というものを構築することが難しかった。だからこそ、熱心に書き、模索し、その生き方を人に認めてもらうことを期待するのであろう。このような欲求はどの年代の手記にもみられるものの、とくに、65歳以上の高齢者の手記にはそれがストレートに表現されているものが少なくない。「人がどう思おうが、自分の生き方は自分でよいと思えればそれでよいのだ」と、主張してはいるものの、反面、そんな生き方を人に理解し、認めてほしい、そのような矛盾した気持が表現されている。

手記5) 大磯の67歳の女性(一人暮らし)～老後だからこそ自分流に生きられる～

……人生ここまできてしまうと、若くみられたいとは思わない。生き方は常に前向き、目まぐるしい世の中の流れに遅れまいとがんばって生きているつもりである。だから、昔を振り返ってもプラスになることはないと思うので好まないが、この文を書くためにあらためて振り返ってみた……「今年よりは幸せだ。」という言葉をよく書く。年金はそこそこもらっているし、土地の値上がりによって財産もあるというわけだ。が、我々の時代には、わかものが減って年金も掛け捨てになるかもしれないという。医学の進歩によって、長生きはできても、経済的な裏づけのない年よりは多い。一体、あの50年間の戦中戦後の地と汗をにじました苦労はなんだったのだろうか……どうか、若い方々、表面だけ見て幸せの一言で片づけないでください。幸せとは、人が決めるものではなく、その人自信が感じるものだと思います。……今は、借家の年金暮らしで少し障害がおきている。だからボランティアもしたいのだが、ままたらない。

ただ一つ幸いなことに、歴史がすきで、50歳のころから独学を続けている。それが、今思わぬ役にたっているのだ。つまり、町内で歴史同好会が始まり、その世話係を勤めるようになり、その延長として、町史編纂のお手伝いやガイドボランティアをたのまれたのである。……本は、町のりっぱな図書館で利用し、テレビ・ラジオで音楽を堪能する。友人との触れあいも大切にしている。だから、私のところは豊かだと自信をもっていえるのである。しかし、人間ボケがいつくるかわからない。思うようにならないのが人生だとわかっていても、恥ずかしくない終わりがたができるように努力していきたい。

手記6) 86歳の広島県の元警察官

……幸運というのかこのとしでも一応健康で、畑へ野菜づくりに通っている。そして、午後は投稿やテレビを見たりして過ごしている。この癖は中学生からの習慣で、就職後は中断していたのだが、偶然、地方紙に投稿したのが掲載され、それ以来また、書くことが始まった。掲載されると、さまざまな方々からお手紙をいただいて恐縮している。……時代遅れの自分の書くものが紙上にのるなんて。その後、読売新聞にも川柳が最優秀作に選ばれるという光栄があった。……昔の中学時代の夢がこの老年になって蘇るとはなんと言うもったいないことであろうかと思われるのである。書くとなると、テレビをみるのも、新聞を読むのも、それだけの注意が必要となり、気をつけるようになる。一つはこれが案外、ボケ防止にも役立つのではないと思われるのである。ここで、私は、若い人たちにいいたい。人生は長い、一旦忘れさっていたことが老年になって再び蘇ることを。他人からみれば、ばかばかしいことと思われるかもしれないが、それはそれで結構、自分の人生は他人のためのものではなく自分のためのものだから。……勤めをやめてからもう13年になるが、野菜づくりと、日記は毎日欠かしたことがない。

自分の存在意義を確信して元気になるという情緒的な効果は、このような高齢の人々にとっては、発達上非常に大事な要素である。なぜなら、感性の働きは年齢が進んでも衰えにくいばかりか、むしろ発達する側面も多く、情緒や感性を刺激されることによって、文化的・芸術的な仕事への原動力が育まれることが高齢者の場合少なくないからである。¹²⁾ これは、自分の生き甲斐として、絵や書道、文章、俳句や詩歌などの芸術活動を揚げるものの多さからも推測されるが、個人的趣味としてだけでなく、社会に認められるような創造的力量を開花させる人もいる。

C. 人生という物語を構成することと生き方の模索

しかし、生き方を書くことの意味は、単に情緒や感性だけの問題にとどまらない。自分の人生を書くということは、人生の中で体験した出来事を、そのもの自体は意味をもたない出来事を、言葉を用いて意味づけ解釈していく作業である。このように、自分の人生の物語を創っていく過程の中で、書きながら、その主人公としての自己のイメージを認識していく。そのように、過去の解釈を通して、現在の自分を意味づけ、もしくは、逆に、現在の自分を認識することによって過去の人生を意味づけ、そこから、これからの人生を構成していくというように、

自分の人生の過去と現在と未来に、一環した意味を与えていくことによって、これからの人生を自分らしく創っていくことを可能にするのである。換言すれば、生き方を書くということは、人生という縦の関係性を織りなしていく作業であるともいえる。そのことは、特に、老いという第2の人生をむかえようとする中年後期の人々に、まず、「自分っていったい何なのか」を客観的に見極める場を提供するといえよう。

手記7) 59歳の福岡県の主婦(美容師)

私の夢は美しく老いることだ。しかし、それが、とても難しいことに私は気づいている。そもそも、美しく老いることは、内からにじみ出る美しさが問題なのだから。知性、教養、社会性、みがかねばならないことばかり。しかし、高校を卒業して、40年余になる美容師生活の間、仕事、子育てと必死で、他のことを考えるゆとりはなかった。その時々で身につけるべきものはみな後回し、気がついたら、残された時間のなんと少ないことか。この少ない時間をこそ有意義に大切に夢をもちながら生きたいと心底考えこんだ。世の中、年をとっても、大きな夢に挑戦して人生を全うする人が沢山いる。しかし、人には、分相応というものがある。お金も地位も名誉もない私だから地に足を着けた夢をもちたい。平凡に人に迷惑をかけずに生きたい。子供が私の死後、「お母さんは、晩年が一番素敵だったね、私もあんなにふうに生きたい」と言ってくれたらどんなにうれしいだろう。……私は、からだに障害をもっている。だから、学校ではずいぶんいじめられてきた。青春時代も楽しいことはなかった。でも今は違う。年を重ねていやな思い出は消え去った。やっぱり、婆よしの時代がきたのだ。足が悪くたって顔が悪くたってなんてことはない。大切なことは、今日という日を精一杯生きること。……ドレスも宝石にも縁はなかったが、美容師になったおかげで、素敵な出会いがたくさんあった。これからは、いっそう出会った縁を大事に、美容師のプロとして、一生懸命生きていこう。そう、人生は楽しむもの。自分を見失うことなく肩の力をぬいて気楽に生きよう。

ここで掲げた手記7と、B節「人生の受容」で掲載した三つの手記は、55歳から60歳代前半のいわゆる老いを迎える前の中年後期の手記である。この年代の人々の手記に注目する理由は、書くことが人生を受け入れることや元気になるということに留まらず、いかに新たな生き方を創出していくかという模索、つまり、思考の手段として機能しているからである。掲載した手記の内容からも明らかなように、この時期の模索には、意外に「生理的な老い」やそれへの不安は意識されていない。むしろ、退職や子育ての終了、もしくは配偶者との死別という社会的役割の変化や、「もうすぐ60歳」というような人生の節目に際して、第2の人生をいかに作っていかうかという課題にたち向かうものといえる。中年後期という時期的なものから、まだ、生理的な老いそのものへの意識は低いものの、自分の人生が時間的にも空間的にも限定されてきたという感覚が、新しい価値意識への模索へと駆り立てている。

それでは、このような模索の段階から、どのように自分の生き方を決定していくのだろうか。典型的にみてみ

ると、人生後半期という第二の人生を創出していくにあたっては、①「自分自身の価値観を変えること」と、②「今を大切に生きること」が共通して主張されている。しかし、①の「価値観を変える」方向は一様ではない。例えば、B説で述べたように、概ね二つのタイプが認められる。その一つは、「仲間づくりや趣味を増やし、積極的に働かなければならない状況を自ら作る」という手記4のような、退職期前後の男性によく見られ、これまでの仕事人生でできなかったことをしたいという、新たな社会的役割の創出や新しい人間関係を求めて積極的に外に向かって活動していくことによって、生き方が見えてくると主張するタイプであり、もう一つは、女性に多く、自分に残された限定されたものを自分なりに味わい直し、その意味を掘り下げていこうという、内に向かい内面的な充実を得ようとするタイプである。そして、人生の意味を捉えかえし内面的に深めていきたいという、この後者の価値観が、生涯学習への欲求と結びついていきやすいことは、多くの手記からよみとることができる。このような後者の価値観がよく表われているものは、「手の届かない夢を追うのではなく、自分にとっての美容師という職業のもつ意味を今一度理解し直すことによって、あらためて生き甲斐を見出している」という手記6や、「生き甲斐とは、全力投球で生きてきた生活の跡を見直すことによって泉のように湧いてくるものだ」という実母の介護をしている女性の手記2、また、「若いころの遺産を牛のように心地よく反芻することによって、当時のことが今になって理解できるようになった」と表現している元教員の主婦の手記8、「若いころは、社会への挑戦であったが、今は自分への挑戦である」という、夫と死別した女性の手記7、また、「若い頃とは異質の内面への精神的な充実感を感じ、知らぬことだらけの人生に気づいた」と表現している心臓病の男性の手記9などがあげられ、中高年期における成熟とは何かを示唆しているといえよう。

しかしながら、このように、二つのタイプが認められるものの、一人の人間の価値観は、そのどちらかというのではなく、両要素とも合わせ持つことが読みとれる。それは、A説で述べたように、人はどんな環境におかれても、基本的には社会との関わりの中で自分自身を見出そうとする存在であるし、またそれだけでなく、時には、自分の生き方を振り返り、そのような個々の社会体験に基づいた過去や現在の自分への解釈を構成し直すことによって、生きる意味や人生観をリフレッシュしてかなければならない存在だからである。このような、横と縦の意味の問い直しのバランスがうまくいったときに、

真に内面的な充実感を感じることができるのではないだろうか。②の「今日を大切に生きる」ということも、このような境地に達した者から出てくる言葉といえよう。

D. 自分との対話の創造— Convoy（人生の伴走者）として

日本人の成熟、とくに中年期に注目して、ライフコース研究を行なった、アメリカの文化人類学者、D.W. プラースは、人は Convoy と呼ばれる、共に人生を歩んでいく身近な他者による「文化的基準」に導かれて成熟していくが、それは、彼らとの対話を通して、自己イメージを認識・変容させていくことと関係していると指摘する。¹⁹⁾ つまり、Convoyを媒介にした対話の継続と蓄積という概念によって、大人が社会や時代の流れの中で成熟していくことを説明しているが、そんな人生を伴走していく他者—人生における多様な場面で、自分の人生について、過去のみならず、現在の些細なことまでも、絶えず語りかけ、対話することによって共に自己イメージを形成していく身近な者—とは、他者に限らず、時として語り手自身でもあるのではないだろうか。そして、そのような自分との対話を豊かにするのが書くことであると考えられる。次は、夫と死別した女性のものである。

手記8) 64歳の千葉県的女性、3年前夫死亡、一人暮らし ~私の挑戦~

私が60の時、夫が癌で他界した。ひとりになった私は、自分の生活設計を自分で立て、一人で生きていく決意を固めなくてはならなかった。……勤めを止めた私には何があったろう。それは、意欲と健康、と自由な時間だった。やりたいものはたくさんあったが、私は、悲しみから立ち上がるために、まず、できないこと、つらいこと、投げ出したくなるものに挑戦してみようと思った。そして、英語に取り組むことにした。週一度、カルチャーセンターに通い出した。……新しいことに挑戦する、それは、苦しいことだった。英語のある日は朝から胃が痛んだ。でも、やすんだらそこで終わりと、自分で自分に言い聞かせた。叱るのも私、誉めるのも私だった。……初めて会話らしい会話ができるようになったことがうれしくてたまらなかった。—挑戦—私は、この言葉がすきだった。今でも好きだ。しかし、あのころと今とは違う。若いころは、人と競いあわなければ、挑戦という感覚がなかった。挑戦という言葉聞いただけで、人にまけまいという競争心が先にたった。今は、目標に向かって自分なりの努力をつづけていくこと、つまり、自分への挑戦なのだ。そして、それでいいのだと思えるようになった。……英語が話せるようになったら、外人に日本語を教えてあげたいという夢ができた。今の私は昔とは違う意味で挑戦を始めたのである。

彼女は、夫を亡くして、新しい状況を拓くために英会話を習うことを決めたが、ややもすると挫けそうになる自分に向かって「休んだらそこで終わり」と言い聞かせる。「叱るのも私。誉めるのも私だった」と叙述しているように、おそらく、夫が生きていたら、自分に言ってくれるであろうことを、彼女は自分自身に向かって言う。夫はいなくなっても、彼女の中に住みついていて、対話

は続くのである。このように、よい人間関係を育むことができたものは、それが消滅したとしても、その関係を内在化させ、それをもとに成長し続けることも可能だ。彼女が、「英語が話せるようになったら、外人に日本語を教えてあげたい」と、失意の状況を乗り越えて、自分に「挑戦」し、自分自身の新しい存在意義を社会に向かって作っていくことを夢みるようになったのも、今はなき夫との関係を精神的基盤にもち、伴走し続けているからこそなのである。

この例のように、人は自己の中に他者を内在化させ、対話している場合もあるし、日常生活の中においても、内語や内言¹⁹⁾と呼ばれるような、自分自身で自問自答するような対話の形式も存在する。これらのことを考えれば、プラースのいうConvoyとは、語り手自身も含めて考えるほうが自然であろう。特に、人生の伴走者が欠けていきがちな中高年期においては、自分との対話の持つ意味が重要にならざるをえないが、単に失ったものの補償としてというのではなく、もっと積極的に捉えれば、中高年期とは、これまでの豊富な人生経験を内在化し、それらの意味をより深く味わうことによって、自分自身の中で豊かな対話を創造し、膨らませていくのに適した時期であるとも考えられよう。

手記9) 62歳の静岡県の主婦、元教員 ~自分との向き合い~

……若いころの私は、仕事についていたから、その仕事を全うすることしか考えなかった。仕事は常に、全力投球。私の現役時代は、先公後私一本やりだった。しかし、仕事はその人の人間づくりだとしたら、この時代に多くのことを学び、それなしに今の私はかたれないだろう。……今、私は、そのころの遺産を牛のように心地よく反芻しながら生きている。今になって、当時学んだことが理解できるものもあれば、そのものが今、はっきり見え始めたといえよいか。それは、図らずも自分との対面であることに気づいたのである。……今までは、仕事を通して学び、人を観察し、社会をみてきたが、そういうものを全て取りさつて、ストレートに自分との対決になった。かなりの柔軟性は、ついてきているものの、夢を育むものは何ひとつとして手もとに残されていなかった。せめて、今見えてきたものを書きとめておこうと、手作り新聞を月一回発行してみた。……生涯学習という名のもとに「好きなことにチャレンジしませんか」という募集は、ひきもきらないが、家族、経済的な余裕、活力という要素にかなり揺さぶられ、意味ある日々をみずみず見捨ててしまう結果となっている。……いま、絵を描こうとしている。だが、この私の行為は、好き勝手に生きているわけではなく、あくまで、「自立」「自分との向き合い」のための行動であるという自信をもっているのである。

手記10) 66歳の豊島区の元会社員 ~黒い心臓~

心臓や目が悪くなってから、60の手習いとして、手探りで、読み、書き、語学を勉強している。……心臓病でたおれてから、読書量が増えた。それまでの、仕事におわれる生活にはなかったことである。読書から新鮮な好奇心が育っていった、読書が発点となって、自分でも文章が書きたくなった。旧友に手紙を書いた。旧友との疎遠が急に縮まっていく。この年代になると、誰もが余生を手探

りして、お互いにその過ぎかたの下手なことを慰めあう。何をしても面白かったことを懐かしみ、それが一瞬の追憶でしかないことを嘆いて終わる。……「書くこと」はこうして生き甲斐になった。しかし、今度は目が悪くなった。左眼は失明し、右眼もどうなることか。行動は、ますます制限され、字が書きにくくなった。次男がワープロをくれた。私の文化革命だ。機械には弱いけど時間はたっぷりある。好奇心はまだ、消えていなかった。そのころ、文集同人誌の会員となった。そこで、83歳の老女と知り合った。白内障で小さな文字がかけなくなった彼女にかわって、その原稿をワープロ打ちしてやった。そしてそれは、見事な著書となり多くの人が感動して読んでいる。こうしたことを通じて、古い器に新しいものを注ぐ喜びをした。若いころとは異質の、内面への精神的な充実感があった。知らぬ事だらけの人生に気づく。見過ごしてきたものが、病魔のおかげでいくらでも垣間見る機会が残されているのである。今、自分の生をいとおみたい。回顧もいいが前進もできる。生涯学習がある。もうすぐ生まれる混血の初孫のためにスペイン語を習っている。生の有るうちに、孫と話ができればと思う。

人生後半期とは、時間的にも、身体的にも、人間関係においても、自分に残されたものが限定されていく中で、失われたものを単に空間的に補充していくのではなく、そのような試練をよい方向に膨らませることができれば、かえって内面の充実を促すきっかけともなる。その結果、若い頃とは異なる質の新たな役割を創出していくことも可能だ。手記9の女性が、退職してから「今になって、当時のことが理解できるようになったものもあれば、はっきりとみえはじめたと言えよいか。それは図らずとも自分との対面であることに気づいたのである。」と語り、「せめて、今みえてきたものをかきとめておこう」と、絵や新聞などの表現活動に向かっているように、また、手記10の男性が、健康を害してから、「若いころとは異質の内面への精神的な充実感」を感じ、書くことを始めたように、また、ここでは掲載できなかったが、大病を患って始めて、それまでは言葉の上でしか理解できなかったことが実感をとまなげて理解できるようになり、病院のベッドの中でその感動を書き綴ることを生きがいにして60代の男性など、人生における試練が、書くことを通じて内的対話（自己との対話）を豊かにし、それが独言¹⁵⁾や自家発酵の次元を超えて社会化していく中で、同時に生きる意味を深めていく例である。このような過程を経て、中高年期にはじまる表現活動が、高齢期になって、豊かな生き甲斐として生活をささえたり、中には芸術的な評価に値するような作品をも生み出される場合もある¹⁶⁾

手記10) 所沢市の75歳の女性(元教員、40年前夫と死別)～生きる伴走の記～

切嗟琢磨不足の思いはあるものの、戦後教員として生きた歳月は、人間好きの性分とあいまって、生き甲斐のある日々を重ねることができた。退職ごも、多くの人々と交流でき、程々の社会参加も楽しむ暮らしの中で、少し悔いありは、抑制して生きた部分の述懐とでもいおうか。……10年前から五行日記を書いているが、日記こそ、

一日のしめくり、明日への指針、生きる伴走として生涯書き続けたい。……このように書くことによって自己分析してみると、大正生まれの節約精神に加えて、自主自立の習性が、安閑とした暮らしを潔としない結果となって、孤独や退屈とは無縁の生活を送っているようだ。本はよく読むほうだし、手紙魔と言われるくらいに手紙を書く。……幸せを図る物差しは、個々別々、私流価値観で意欲的に70代をいきしていきたい。

IV. 生涯学習への意欲の形成

A. 人生の意味の「わかり直し」への志向

それでは、書くことは、生涯学習ということ考えた時にどのような位置づけをもつものなのだろうか。佐伯は、子供の学習におけるヤル気の要因として、「双原因性感覚」というものをあげる。「双原因性感覚」とは、「他者」が極めて友好的な協力者として自己の中に住み込み、自己の中の「自己」と協力的・建設的な対話を始める。それがわかろうとする力になり、個々の学習テーマが「できる」ようになるということを超えて、「わかる」とする段階、つまり、一つの知識が、今まで関連づいていなかったことと関連づき、見えなかったことが見えてくる状態へ、さらにそれを超えて、それらの「わかることやできること」の意義を認識し、納得し、繰り返し「わかり直す」ことを志向していく態度に結びついていくとする。¹⁶⁾そして、その「双原因性感覚」を育てるためには、大人たちもいっしょになった「わかり合い」の文化的実践の場を作っていくことが必要だと主張する。¹⁷⁾このことは、子供に限らず、大人にも当てはまるといえないだろうか。

例えば、プラスのいう、継続的な対話のやりとりの中で共に成熟していく人生の伴走者 Convoyという概念も、佐伯の主張する「わかり合いの文化的実践の場」の一つと位置づけられよう。大人の場合、子供と比較して、豊富な経験的蓄積を持つ。したがって、例えば、夫を亡くして英会話習い始めた主婦(手記8)のように、たとえ現実の生活の中では、夫との対話が消滅したとしても、過去の豊かな対話的關係を内在化しているという基盤があるからこそ、「双原因性感覚」を保ち、成長し続けることが可能であった。このように、大人、特に中高年の場合は、その経験の蓄積によって、双原因性感覚的基盤が構築されている場合が多い。その場合は手記8の例のように、自力で生き方を見出していくのも可能だ。しかし、この例のように、精神的に自立している者ばかりとはかぎらない。むしろ、現実には、自力では自分の人生を乗り越えていくことが出来ず、生きる意欲を見失ったり、心の危機に陥る場合も多い。また、わかる喜びや意欲を子供時代に形成できなかった者もいるだろう。そ

のような意味では、共同の文化的実践の場で、他者との相互理解を通じた自己の再認識と、精神的な癒しの作用やわかり合う喜びの共有が必要なのである。1950年代の生活記録運動は、このような意味からも、共同の文化的実践の場として評価されるものではないだろうか。

また、書くことは「双原因性感覚」を高めるひとつのメディアのようなものであるから、実際の経験との相互作用があってはじめて、内的対話も膨らませていくことができる。例えば、自己の中の友好的な他者（大人の場合はそれがもう一人の自己となっている場合が多い）との対話を豊かにするのが書くことであり、書くことによって「双原因性感覚」は育てられようが、それは、「他者とのわかり合い」という文化的実践から得られる肥料を施されなければ、除々に痩せ細り、空虚な自己満足となってしまうだろう。

中高年期は、過去の豊かな人生経験という蓄積をもつ。それを、繰り返し「わかり直し、納得し、その意味を深めていく」ことが生涯学習への欲求につながるのだとすれば、そのような欲求を支えていくのは、双原因性感覚であり、書くことによってその感覚は補強される。また、書くことそのものに、「他者とのわかり合い」という文化的要素が内在しているともいえようが、それをより豊かにしていくためには、やはり、社会的状況の中で書き、それが読まれ、批准され、かつ、その生き方が他者を感化し、また、他者の生き方から感化されるといった「わかり合い」の文化的実践＝生涯学習として位置づけられていく必要があるだろう。

B. 「書かれる人生」と「生きる人生」

ところで、書かれる人生や生き方と現実の経験や生活とは、どんな関係にあるのだろうか。そして、書くことによって、現実の生活は変わるのであるだろうか。無論、書かれた人生は、経験に一貫性をもたらした言語的構成物であり、自分の言葉で解釈され意味づけられた物語であるから、実際の経験とは別のものではあるが。

この問題についてS. クライツは「人間の経験は物語の性質をもち、そのおかげで、人は記憶と期待を現在に結びつけることができ、自分の人生を多少とも一貫したものと感ずることができる。¹⁸⁾」、つまり、人生についての物語は、実際の経験について構成されるだけでなく、経験を構成していく要因でもあるという。人生について「書く」ことは、話すことより、認識を明確にし、時間的広がりや拡大し¹⁹⁾、その物語性をより補強することだと考えると、クライツの説からいえば、書くことによって、時の流れを超えて、より一貫したその人らしい行動

や経験が可能になるといえる。

しかし、それは反面、書くことによって、自分のもつ理解の枠組みに経験を押し込めることにもつながりかねないということにもなる。換言すれば、従来の自分の理解の枠組みを超えた経験がしにくくなるともいえよう。そのような書くことのもつ限界性は、言葉のもつ限界性（例えば、言葉では言い表すことのできないという経験など）と、文章に構成することからくる限界性が考えられるが、それらは、他者との相互理解や、異質の文化との出会いなどの学習を通して、むしろ創造的な方向へと転換させることも可能だ。中高年の場合、生活そのものは空間的に限定されてくるからこそ、書く世界では創造力が豊かになるという側面がみられた。一方、高齢者の場合は、逆に、座夕の銘のような言葉（例えば、一に感謝、二に〇〇などのような）を繰り返し語ることによって、生活を規定し、自分を限定していくことから、精神の安定を確保するような側面がみられるのである²⁰⁾。いずれにせよ、書くことは人間関係によって育まれ、かつ、それを育てていくといえよう。

終わりに

以上、中高年期の人々の手記を実際に用いながら、現代において、中高年が生き方や人生を書くこととはどういうことかについて考察してきた。

ここで思い出すのは、1950年代に勤労青年たちが、戦後の民主化の掛け声とはうらはらな封建性の根強く残る社会において、自分たちの問題を話し合い、書きあうことによって、自分の問題は自分だけの問題ではなく、仲間と共通した問題であり、社会の問題につながることを認識していった生活記録運動の歴史である。当時の日本は、貧しく、戦前の意識を残していたという意味では暗い社会であったが、その暗さの中で、若者たちが、新しい社会を思い描くことができたという点では、明るさのある時代であった。若者たちの個々の生き方の模索は、書くことを通して、新しい社会への模索と集結し、そこから自らの社会的役割やアイデンティティーを形成していった。これに対して、現代は、中高年がその生き方を求めて書く。長寿化にともない、老後という第2の人生を誰もが経験しなければならない時代になったが、それに対する社会的基盤はまだできておらず、誰もが手探りの状態で生き方を模索しているのが現状のようだ。生活記録の若者達は、仲間や社会という空間的な横の繋がりの中で自己認識を深めていったのに対して、現代における中高年の自分史活動は、社会（横）との関わりの中で

見出した自己を、人生という物語に構成することによって、縦の繋がりの中でその意味を認識し、生き方を見極めようとする。いわば、横糸と縦糸を絡ませながら、人生という一枚の織物を、自分なりの模様で織上げていくことに似ている。そして、書くことは、人生の意味をわかり直し、より深めていきたいという欲求を育み、それが生涯学習への意欲に結びつくことがわかった。

1950年代の日本の社会は、未来に向かって発展・拡大していこうとする若い社会であったが、現代は、むしろ空間的発展という意味では限定された成熟した社会であり、人の意識も、拡大・発展をめざした60～70年代の価値感から、80年代以降は内面的な充実をもとめる方向へと向かい始めている。そして、中高年の間で自分史運動が活発に展開したのは80年代のことであった。このように日本社会の発達・成熟の歴史と現代中高年世代の発達・成熟の歴史は、「書くこと」の歴史を通して見た時に、重ねて理解が可能だ。換言すれば、大人が書こうとする欲求の高まりは、ライフサイクル的な要因だけでなく、社会的変動にも少なからず関係していることがわかる。今後はそのような点に注目し、中高年の意識から見た発達と学習について、ライフコース的手法を試みていきたい。

(指導教官 佐藤一子教授)

注

- 1) 生活記録は戦前からの子供の生活綴り方の影響を受け、1950年代に、勤労青年や主婦たちの間で、文化運動として芽生えた活動である。しかし、50年代終わりには急速に衰退し、多くの批判が向けられる。このような50年代の生活記録などの共同学習の形態は、60年代に入ると、系統学習にとってかわられるが、その後、主体の形成という視点から、その社会教育的意義が再評価されている。
- 2) 生活記録運動の指導者的な存在。勤労女性や主婦の間で「生活を綴る会」を組織し『エンピツを握る主婦』などを刊行した。実感主義という生活記録への批判を受けて、その理論化を試みたが、とりわけ、自分の体験の社会的意味を認識し、そこから生活を変えていくためには、仲間との信頼関係の構築が重要であることを主張した。鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社 1963年参照
- 3) 浦和市の西掘青年学級で講師として生活記録実践に関わる。鶴見と同じく書くことを通じた仲間づくりの大切さを主張したが、アメリカ留学をきっかけに生活記録実践から身をひいていく。
- 4) 稚稿「書くことと生き方の模索—中高年期の学習活動としての可能性」『生涯学習・社会教育学研究』第20号 1996年 東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室 p.72
- 5) Ibid.p.79
- 6) 1968年、「へたに書きなさい」と説く橋本義夫によって機関紙「ふだん記」が刊行されて以来、「ふだん記」の会が各地で生まれ、70年代に入り、集団的な運動として展開していく。現在、自分史講座の講師として活躍している鈴木政子も、この「ふだ

ん記」に育てられた主婦の一人である。この動きが、茅ヶ崎市の市民教養講座で紹介されるに至り、社会教育の場と関わり始める。以後、「書くこと」は各地で学級・講座という名目で、成人の教育内容・方法として定着していく。鈴木政子「本屋のおかみさんになってから」茅ヶ崎常民学舎編『地球がまるごと見えてきた』径書房 1985年 p.118-126 参照

- 7) 色川大吉『新編明精神史』中央公論社 1973年 はしがき
- 8) 色川大吉『ある昭和史—自分史への試み』中央公論社 1975年 p.12
- 9) 55歳から60歳までの投稿女性に関しては主婦が多いが、60歳代は退職期を迎えた職業女性、特に教員、看護婦、美容師が多く、独身者が目立つ。特に、65歳以上の高齢女性では、元教員が多い。しかも、戦後の結婚難のために、生涯独身を余儀なくされてきたことを語る手記も少なくない。一般にはあまり知られていないものの、彼女たちにとって、独りで生きてこざるを得なかった戦後は重く長い。これは、高齢男性の壮絶な戦争体験記に匹敵するものであるといえる。このような影の犠牲者の存在がもっと知られるべきであろう。
- 10) 井上俊は、第二次世界対戦に戦犯として処刑された人々がどのように死を受け入れたかという作田啓一の研究や、太平洋戦争期の「決死の時代」の若者たちに関する森岡清美らの研究を揚げながら、人が人生の物語をつくることによって、自己の人生に耐え、受容していくことを論ずる。井上俊「物語としての人生」上野千鶴子他編『ライフコースの社会学』岩波書店1996年 p.15-20 参照
- 11) 鶴見和子「ときどきの感想」『生活記録運動の中で』未来社 1963年 p.185-9
- 12) 65歳以上の手記によると、生き甲斐として、表現活動（文章、詩歌、俳句、川柳、絵画）をあげている者は多いが、その始まりは、50-60代はじめという中高年期だったと供述しているものが多い。青年期に目指した夢をもう一度という意味でこの時期から再び挑戦するケースが目立つ。
- 13) D.W.プラース（1985）は、目標、資格、業績を定義するものを文化的基準（cultural standard）と呼び、それが、人の人生の時刻表に明確に配列されていて、人生を歩んでいく際の指針となるという。そしてその際に、社会と繋ぐ媒介者として彼を導いていくのが、「道づれ」（convoy）と呼ばれる、人生を伴走する身近な他者であるとする。プラース D. W. 井上俊・杉野日康子訳『日本人の生き方・現代における成熟のドラマ』岩波書店 1985年 参照
- 14) Vygotsky.L.S. 柴田義松訳『思考と言語』明治図書 1975年
- 15) 注11参照
- 16) 佐伯胖『「わかる」ということの意味—学ぶ意欲の発見』岩波書店 1983年 p.111-8 p.139-95
- 17) Ibid.p.207-24
- 18) Crites,Stephen,1986,"Storytime:Recollecting the Past and Projecting the Future," in Sarvin,T.R.(ed.),Narrative Psychology, Praeger Publishers. 152-173
- 19) M・コール「リテラシーの文化的起源」佐伯胖編『理解とは何か』東京大学出版会 1985年 p.107
- 20) 65歳以上の高齢者の場合、使われる言葉が類似しているという傾向をもつ。例えば、よく出てくる言葉として、「感謝」「生かされている自分」「青春とは心の様相をいう」（サミュエル・ウルマンの詩の一節）などがあげられる。